



図説日本の古典

第1巻／古事記	武蔵大 学教授	神田秀夫	奈良国立文化 財研究所長	坪井清足	学習院大 学教授	黛 弘道
第2巻／萬葉集	筑波大 学教授	伊藤 博	成城大 学教授	上原 和	学習院大 学教授	黛 弘道
第3巻／日本霊異記	琉球大 学教授	小島瓊禮	奈良国立 博物館	上原昭一	東京大 学助教授	笹山晴生
第4巻／古今集・新古今集	東京大 学助教授	久保田 淳	美術 史家	白畑よし	聖心女子 大学教授	目崎徳衛
第5巻／竹取物語・伊勢物語	大阪女子 大学教授	片桐洋一	大谷女子 大学教授	伊藤敏子	聖心女子 大学教授	目崎徳衛
第6巻／蜻蛉日記・枕草子	明治大 学教授	木村正中	美術 史家	白畑よし	東京大 学教授	土田直鎮
第7巻／源氏物語	東京大 学教授	秋山 虔	東京大 学教授	秋山光和	東京大 学教授	土田直鎮
第8巻／今昔物語	早稲田大 学教授	国東文麿	美術 史家	梅津次郎	京都女子 大学教授	村井康彦
第9巻／平家物語	神戸大学 名誉教授	永積安明	大阪大 学教授	武田恒夫	京都大 学教授	上横手雅敬
第10巻／方丈記・徒然草	お茶の水女子 大学助教授	三木紀人	東京国立文 化財研究所	宮 次男	東京大 学助教授	益田 宗
第11巻／太平記	早稲田大 学教授	梶原正昭	東京国立文 化財研究所	宮 次男	京都大 学教授	上横手雅敬
第12巻／能・狂言	東京大 学教授	小山弘志	京都国立 博物館	切畑 健	大阪市立 大学教授	原田伴彦
第13巻／御伽草子	国文学研究 資料館長	市古貞次	東京国立 博物館	高崎富士彦	東北大学 名誉教授	豊田 武
第14巻／芭蕉・蕪村	福岡大 学教授	白石悌三	文化 庁	佐々木丞平	学習院大 学学長	児玉幸多
第15巻／井原西鶴	埼玉大 学教授	長谷川 強	東京大 学教授	山根有三	学習院大 学学長	児玉幸多
第16巻／近松門左衛門	学習院女子短 期大学教授	諏訪春雄	大阪大学 助教授	信多純一	横浜市立 大学教授	辻 達也
第17巻／上田秋成	国文学研究 資料館教授	松田 修	東京国立文 化財研究所	河野元昭	学習院大 学教授	大石慎三郎
第18巻／京伝・一九・春水	早稲田大 学教授	神保五弥	名古屋大 学助教授	小林 忠	立正大 学教授	北原 進
第19巻／曲亭馬琴	明治大 学教授	水野 稔	国立国会 図書館	鈴木重三	東京学芸大 学助教授	竹内 誠
第20巻／歌舞伎十八番	早稲田大 学教授	郡司正勝	名古屋大 学助教授	小林 忠	成城大 学教授	西山松之助

図説日本の古典 5 竹取物語・伊勢物語

昭和53年 7月20日 初版第1刷印刷

昭和53年 8月4日 初版第1刷発行

著者代表——片桐洋一 ©1978

発行者——堀内末男

発行所——株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋2-5-10

電話—販売部 東京(03)230-6171

出版部 東京(03)230-6351

振替—15653／郵便番号101

印刷所——大日本印刷株式会社

用紙／カラー 王子製紙株式会社

モノクロ 日本パルプ工業株式会社

製本 中央精版印刷株式会社

文勇堂製本工業株式会社

製本には十分注意していますが、落丁・乱丁の際は
おとりかえいたします。

0391-167005-3041

Printed in Japan

〈企画委員〉

東京大学教授

秋山 虔

国文学研究資料館長

市古貞次

学習院大学長

児玉幸多

早稲田大学教授

神保五弥

東京大学教授

山根有三

〈第五巻・編集委員〉

大阪女子大学教授

片桐洋一

大谷女子大学教授

伊藤敏子

聖心女子大学教授

目崎徳衛

竹取物語・伊勢物語



集英社

目次

●カラー図版●竹藪の風景／小倉山／『竹取物語』古活字十行申種本／『竹取翁井かぐや姫絵巻物』平等院の梵鐘／法界寺阿弥陀堂内陣小壁画／
「在原業平像」佐竹本／三十六歌仙絵／不退寺／春日の里／伊都内親王願文／長岡京遺跡出土瓦／『伊勢物語図色紙』宇津の山／三河のカキツバタ群落／
『伊勢物語図屏風』むさし乃／雪の大原／惟喬親王の墓所／斎宮寮の遺構／斎王宮跡出土陶器／斎内親王参宮図／見立業平涅槃図／奈良絵本『伊勢物語』
風流錦絵伊勢物語

初期物語の世界——『竹取物語』『伊勢物語』を中心に 片桐洋一……………28

初期物語—その実態と方法 『竹取物語』の成立と方法 『伊勢物語』の成立と方法

『竹取物語』『伊勢物語』の歴史的背景 目崎徳衛……………42

承和の変をめぐる 惟喬親王をめぐる

●図版特集●

現代絵画における『竹取物語』 中村溪男……………53

『竹取物語』へ中村岳陵筆／『竹取物語絵巻』へ小林古徑筆／『竹取物語絵巻』へ前田青邨筆／
赫耶姫へ吉川霊華筆／『散華』へ竹内栖鳳筆

『竹取物語』——作品鑑賞 片桐洋一……………60

竹取の翁とかぐや姫 五人の求婚と石作皇子 車持皇子と蓬萊の玉の枝 阿倍右大臣と火鼠の皮衣
大伴大納言と龍の頸の玉 石上中納言と燕の子安貝 帝の求婚とかぐや姫の悩み かぐや姫の昇天

『竹取物語』の成立 片桐洋一……………80

『竹取物語』の現状と素型 民族説話と『竹取物語』 『竹取物語』は外国種か 『竹取物語』の本性

●図版特集●

『伊勢物語』の美術と工芸 伊藤敏子……………97

宇津山図団扇／八橋図屏風／伊勢物語歌かるた／業平東下り図鑑／業平東下り図杉戸絵／八橋図蒔絵硯箱／萬の細道蒔絵文台／扇面業平蒔絵硯箱
業平東下り図香枕／武蔵野墨田川図乱箱

『伊勢物語』——作品鑑賞 片桐洋一

104

初冠 春のながめ 我が身ひとつは わが通ひ路の関守 芥川 東下り きつにはめなで
井筒にかけし 梓弓 すける物思ひ 紫のゆかり ゆく螢 若草の妹 田刈る業平
花橋 つくも髪 恋せじのみそぎ 狩の使 小塩の山 河原の院 交野の狩 小野の庵室
さらぬ別れ 布引の滝 藤の花かげ 我とひとしき 昨日今日とは

●図版特集●

『伊勢物語絵巻』 伊藤敏子

145

小野家本『伊勢物語絵巻』／久保家本『伊勢物語絵巻』／異本『伊勢物語絵巻』／白描『伊勢物語絵巻』

絵巻にみる『伊勢物語』 伊藤敏子

152

『伊勢物語絵巻』の成立 『伊勢物語絵巻』の遺品 物語と絵の伝流・I 物語と絵の伝流・II

『伊勢物語』の魅力——対談 馬場あき子・片桐洋一

168

『伊勢物語』との出会い 「能」と『伊勢物語』 『伊勢物語』の語り手・作者

『伊勢物語』の「みやび」と「風流」 「男の物語」から「女の物語」へ 在原業平の虚像と実像
失われた風流を求めて 芥川の鬼 切れる文章、かかる文章 『伊勢物語』の読み方

●図版特集●

謡曲の中の『伊勢物語』 堀口康生

181

能面中將／能「井筒」／在原神社／能「杜若」／能「小塩」

待つ女——「井筒」の手法 堀口康生

188

中世と『伊勢物語』 「井筒」の手法 待つ女

王朝の美意識と人間観 目崎徳衛

196

王朝の古典と現代 花によせる美意識 月によせる美意識 「色好み」の人間観

『竹取物語』『伊勢物語』作中和歌便覧 片桐洋一

210

『伊勢物語』関係年表 片桐洋一

212

『伊勢物語』関係系図 片桐洋一

214

凡例

- 1 古典文学の珠玉の名作を立体的に構成した本シリーズでは、その内容をさらに意義づけるため、その部分の執筆者が各図版の解説にあたったが、それ以外の場合は、とくに解説の末尾に氏名を付記した。
- 2 本巻の仮名づかいは、原則として現代仮名づかいによった。古文の引用については、歴史的仮名づかいを原則としたが、必要に応じ原本通りとした部分もある。特殊な美術・歴史用語の引用などについては原本通りとした。
- 3 本書の『伊勢物語』の章段は、藤原定家天福二年本によった。
- 4 参考文献を各部分の章末に一括して注記し、読者の便をはかった。
- 5 各図版に添記した国宝・重文・史跡のうち、重文は重要文化財、史跡は国指定史跡の略である。なお、個人所蔵者名は略させていただいた。
- 6 本巻の図版写真および資料の収集にあたっては、その所蔵者・管理者・著作権者・提供者・撮影者など、関係者各位のご好意とご協力を賜った。

〈第五巻・執筆者〉

大阪女子大学教授

片桐洋一

大谷女子大学教授

伊藤敏子

聖心女子大学教授

目崎徳衛

東京国立博物館

中村溪男

歌人

馬場あき子

大阪女子大学講師

堀口康生

〈装幀〉

後藤市三

レイアウト

宇喜多邦嘉

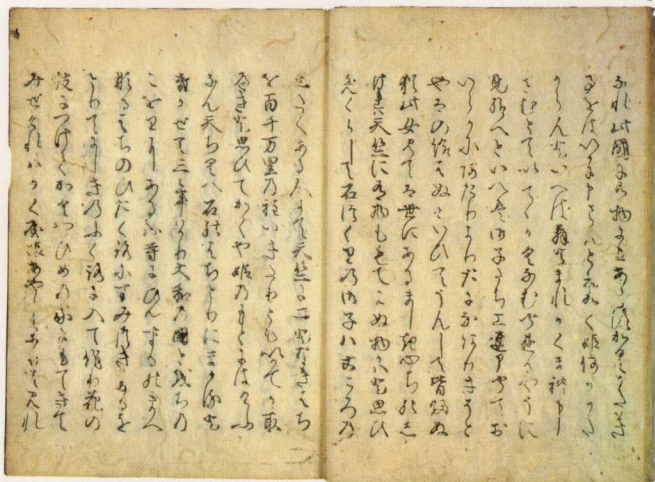
樋口英男



1 『竹取物語』の舞台——求婚者の名前からみて、『竹取物語』の舞台は飛鳥(あすか)の都であったことが知られるが、竹取の翁(おきな)の名「さぬきのみやつこ」からも、大和国(奈良県)広瀬郡散吉(さぬき)郷(現在は北葛城郡)が浮かびあがっ

てくる。飛鳥の西北方、斑鳩(いかるが)の南、古墳なども多いところである。今も竹藪は多いが、当時はこのような孟宗竹ではなく、日本古来の細い竹が生い茂っていたのだろう。本図は奈良県北葛城郡広瀬神社近くの竹藪風景。





3 『竹取物語』〈古活字十行甲種本〉——平安時代物語のなかでもっとも古い『竹取物語』であるが、古い伝本は少なく、重要文化財に指定されている天正20年(1592)書写本(27図参照)がもっとも古いものである。本書はそれにおくれること数年、慶長年間(1596～1615)に刊行されたものである。1字ないし5字連続の木製活字を用いて刷ったもの。以後の古活字本・整版本、さらには明治以後の活字本の源流として高く評価されてよい本文である。本図は小倉山を舞台とする石作皇子の話の冒頭部分(右8行目から)。縦28.1cm 横20.6cm

『竹取物語』古活字十行甲種本・釈文
(右八行目より)
猶、此女見では世にあるまじき心ちのし
けれバ、天竺に有物ももてこぬ物かハ、と思ひ
めぐらして、石つくりの御子ハ、こころの
したくある人にて、天竺に二となきはち
を、百千里の程いきたりとも、いかでか取
べきと思ひて、かぐや姫のもとには、けふ
なん、天ちくへ石のはちとりにまかる、と
きかせて、三年ばかり、大和の國とをちの
こをりある山寺にびんずるのまへ
なるはちの、ひたぐろにすみつきたるを
とりて、にしきのふくろに入て、作り花の
枝につけて、かぐやひめの家にもてきて、
みせけれハ、かぐや姫あやしがりて見れ

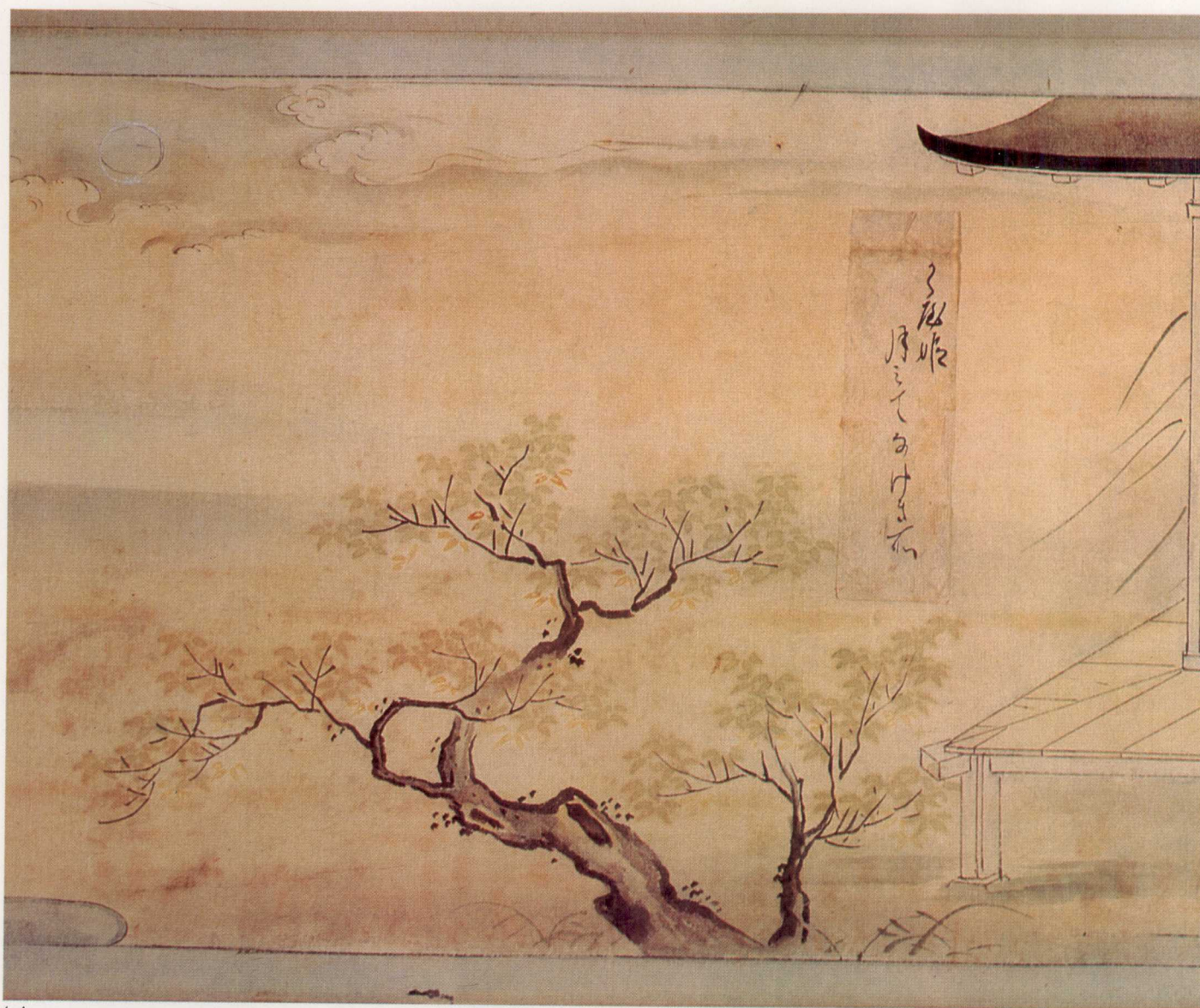


2 小倉山——第1の求婚者石作皇子(いしつくりのみこ)は、天竺(てんじく)にも二つとない釈迦が用いた石鉢(いしのはち)をもってくるようにと、かぐや姫から難問を出されたが、そんなことができるはずはない、と思つて、大和国の十市郡(とおちのこおり)の小倉山(おぐらやま)近くの山寺に3年間かくれ住み、贖物(にせもの)をさしだした。「小倉山」は『万葉集』にも詠まれている大和の小倉山のこと。今の奈良県桜井市倉橋あたりの山だという。飛鳥のすぐ東である。



4 『竹取翁井かぐや姫絵巻物』部分——古くから『竹取物語』に絵巻が存在したことは、『源氏物語』(絵合の巻)によって知られるが、現存する絵巻はいずれも江戸時代にはいつてからのものである。本絵巻も江戸時代中期の作であるが、筆法や構図からみて、その原拠になったものは室町時代以前の作と考えてよさそうである。詞書(ことばがき)はなく、画中にその場面を説明する貼紙が付せられている(後代のものであろう)。江戸時代に成立した『竹取物語』の絵巻は多いが、これほどに情趣に富むものは少ない。滋味掬(きく)すべきものがある。A図は「かくや姫、月みてなげく所」。B図は「勅使月ノ岩かさ、不死ノ薬つば富士ノ山へ持行」所。各縦28.7cm/東京都・宮内庁書陵部





4-A



4-B



6 飛天〈法界寺阿彌陀堂内陣小壁画部分〉——長押(なげし=柱と柱をつなぐ水平材)の上を10区に分ち、それぞれ1体ずつ、さまざまな飛天が描かれ、本尊のほうへ向かって飛翔(ひしょう)する体(てい)になっている。漆喰(しっくい)の壁に直接に無造作なタッチで形を描き、赤・黄・青・緑などで大まかな彩色を加えている。見る者をして、天に遊ぶ気分をいだかせるものである。12世紀末から13世紀初頭にかけたの作といわれている。1区 縦82.4〜82.7cm 横146.7〜148.2cm／京都府・法界寺

5 飛天〈平等院の梵鐘〉——かぐや姫が天へ昇っていく姿に、当時の人々は仏教でいう飛天を想像したことであろう。『竹取物語』は仏教や道教や神道など、さまざまな要素が混合したところにその特色があるからである。飛天は飛天人ともいい、仏の働きをよここび、天楽を奏し、天華(てんげ=天上界の霊妙な花)を降らせ、天香を薫(くん)じ、璽路(ようらく=首飾り)をなびかせて虚空(こくう)を飛行するもの。早くから寺院の莊嚴(しょうごん)などに用いられていたが、この梵鐘もその一つである。制作年代は平等院創建の11世紀中ごろという。総高19.0cm 口径123.6cm／京都府・平等院

6-A 国宝



6-B 国宝



7 「在原業平像」〈佐竹本『三十六歌仙絵』〉——藤原公任(きんとう)が撰んだ「三十六人撰」の歌人たちを、いつのころからか「三十六歌仙」とよぶようになり、鎌倉時代になるとその肖像が好んで描かれるようになった。佐竹本『三十六歌仙絵』はその代表作。佐竹家に巻物として藏されていたが、大正8年(1919)に切斷売却され、諸家に分藏されるようになった。大歌仙ともよばれてるように、莊重華麗、とくにこの業平像は直衣(のうし=平常着)・指貫(さしぬき=袴^{はかま}の一種)というくつろいだ姿のなかに、悠然たる品格と高貴さをただよわせ、いかにも業平(825~80)らしい。また、扇子を持っている姿もほかになく、おもしろい。

「在原業平像」〈佐竹本『三十六歌仙絵』・釈文

藏人頭右近衛權中將從四位上在原朝臣業平

平城天皇孫彈正尹阿保親王五男母伊豆内親王桓武天皇第八女

代の中にたえてさくらのみかりせば
はるのこころハのどけからまし

藏人頭右近衛權中將從四位上在原朝臣業平

平城天皇孫彈正尹阿保親王五男母伊豆内

親王桓武天皇第八女

代の中にたえてさくらのみかりせば
はるのこころハのどけからまし

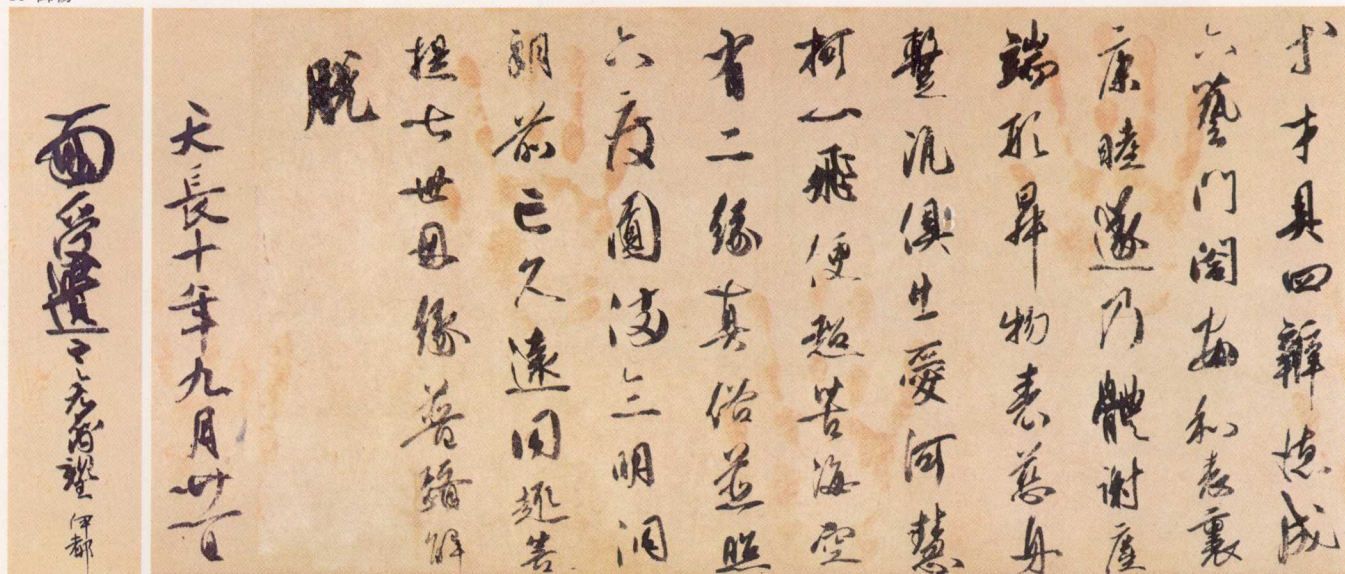


8 不退寺——正しくは不退転法輪寺。平城天皇御陵の東1kmあまりの地にある。寺伝によれば、平城(へいぜい)天皇の「萱(かや)の御所」の遺構、子の阿保(あぼ)親王、孫の在原業平もここに住んだが、承和(じょうわ)14年(847)に業平が自作の観音を安置したのが寺院としてのはじまりであると伝える。大和十五大寺の一つ。庭もよく、平安時代作の五大明王像、鎌倉時代作の南門、同じく多宝塔など、すばらしい文化財も多い。奈良市法蓮東垣内町。



9 春日の里——「昔、男、初冠(うひかうぶり)して、奈良の京春日の里に領(し)るよしして狩にいにけり」——『伊勢物語』の冒頭は京都ではなく、このように奈良の春日の里からはじまる。業平の祖父は平安時代第2代の天皇、しかし奈良の旧都へふたび都を移そうとして失敗した平城(へいぜい)天皇である。祖父ゆかりの地での初恋から物語が展開することは、「失われた昔を思う姿勢で」「充たされぬ想いを嘆く」この物語の方法と無関係ではなからう。奈良市春日山東麓。





『伊都内親王願文』〈伝橘逸勢筆〉部分——業平の母である桓武天皇皇女伊都(いと)内親王(?～816)が、生母藤原平子(へいし)の遺言によって、天長10年(833)9月21日、興福寺の東院西堂に香燈読経料として墾田(こんでん=新たに開墾した田地)16町余(約16ha)、荘1処、畠1町(約99a)を寄進した際の願文(がんもん)である。筆者は不明だが、三筆の1人橘逸勢(たちばなのはやなり)の筆跡と考えられている。運筆のスピード、大字と小字の配合など、とくにみごとである。末尾に別筆で細く「伊都」と自署している。また、願文中の24か所に、内親王の手形が朱で押されている。ひじょうに小さい。業平の母は小柄な人だったのであろうか。紙本墨書。縦29.6cm／東京都・宮内庁

11 長岡京遺跡出土瓦——桓武天皇(737～806)は延暦3年(784)に平城京から山城国の乙訓(おとくに)郡長岡(今の京都府向日市から長岡京市へかけての一带)へ都を遷した。この新都はほぼ完成したのだが、数度の大洪水のほか、帝の寵臣藤原種継(たねつぐ)の暗殺や、皇太子早良親王の憤死、さらには皇太后・皇后の崩御等の不吉な出来事がつづき、10年にして平安京へ再遷都せざるをえなくなったのである。あまりに早い再遷都であったために、かつては長岡京は机上プランだけだったといわれていたが、近年の発掘調査でおおむね完成していたことが実証された。本図はその出土品の一つの珠文縁八葉複弁文軒丸瓦。業平の母である桓武天皇皇女伊都内親王は、平安遷都後もそのまま長岡に住んでいたであろう(第84段参照)。／京都府教育委員会

11 長岡京遺跡出土瓦——桓武天皇(737～806)は延暦3年(784)に平城京から山城国の乙訓(おとくに)郡長岡(今の京都府向日市から長岡京市へかけての一带)へ都を遷した。この新都はほぼ完成したのだが、数度の大洪水のほか、帝の寵臣藤原種継(たねつぐ)の暗殺や、皇太子早良親王の憤死、さらには皇太后・皇后の崩御等の不吉な出来事がつづき、10年にして平安京へ再遷都せざるをえなくなったのである。あまりに早い再遷都であったために、かつては長岡京は机上プランだけだったといわれていたが、近年の発掘調査でおおむね完成していたことが実証された。本図はその出土品の一つの珠文縁八葉複弁文軒丸瓦。業平の母である桓武天皇皇女伊都内親王は、平安遷都後もそのまま長岡に住んでいたであろう(第84段参照)。／京都府教育委員会

